

最大の2次災害『火災』 「モノの大切さ、有難さがわかった。毎日何気なく使っているもの」
18歳 高3・女 当時8歳)《引用3》

～小さな火で消し止めることが出来れば、何かは残る～

〔初期消火〕の重要性



家庭用の消火器でも多くの人が持ってくれば、大きな戦力になります。
自治会単位で、屋外に設置する事も対策の1つです。



災害時、通電復帰の際に漏電による火災が多く起こります。
余裕があれば、ブレーカーを落としましょう。

3. 公助を待つ

「辛い気持ちがわかるから。もらって嬉しい気持ちがわかるから。私にできることがある、と思う」 18歳 高3・女 当時8歳)《引用4》

誰もが被災者の一人として、味わったことの無い「つらい」生活を強いられる現実

～お互いが、受け入れようという気持ちの大切さ～

外部からの支援は、安否確認から始まる被災者全体をサポートする動きから、徐々に個人ごとのニーズに対応が向いていきます。

そんな時大事なことは、被災者が求めていること、そして支援者ができること、をお互いが素直に受け入れようという姿勢だったようです。

私たち社協は

信頼できる機関として、

被災者から寄せられる支援の要望

支援活動者の持てる能力によりできる事

この情報をよく見えるように整理し、つなげていく役割が求められています。

《引用1～4》は、阪神大震災で当時は子どもだった被災者に、10年後インタビューした記録です。

出典 『M73 子どもたちの見たもの』 2005年1月 (株) 宙出版・編

もう一方で、『災害弱者』という存在にも理解を得ていきたいと考えます。

高齢者や子ども

配給があっても長い列に並べない...
荷物を運べない。

障害者

危険箇所を目で察知できない。
放送があっても聞けことができない。
介助がないと移動できない。
状況を理解できない。

療養者

骨折して手足が不自由
専用の医療器具による治療が受けられないと、命にかかわる。

そしてもちろん

被災者

身寄りがなくなった
気力が湧かない
食欲不振・怒り
悲しみ・不安

災害発生時、これらの方々には特にあらゆる面で状況に対応することが難しくなると予想できます。しかし、災害弱者に特化した設備や支援政策も、まだこれからの事ようですし、普段は守られている個人情報も、共通理解のもとにある程度開示していくことが必要かもしれません。

私たち社協には、多くの高齢者・保育施設、障害者団体が会員として参加されています。今後、この防災を通じた視点で、具体的に必要な動きとは何なのか考えていきたいと思えます。

【放課後児童くらぶ】

シリーズ『子育て』を考える

『子育て』は、一方で親自身の『成長』に気づく過程であった、と振り返る方も多いのではないのでしょうか。家庭を取り巻く環境が「つねに」変化している中では、その一端の紹介にとどまるかも知れませんが、いくつかの現状をお伝えしていくコーナーを設けました。

親が後ろで見守るクラブ

- 放課後、保護者が家庭にいない間、子ども達が安全に過ごすための場として、横浜では『放課後児童クラブ』(別名：学童保育)という活動が各所で行なわれています。
- 児童クラブは有料です。1ヶ月1万円から1万5千円ぐらいかかるようです。他に『はまっ子ふれあいスクール』のように無料のところもあるわけですが、ここに子どもさんを預ける親御さん達は『仕事も子育ても充実させたい』という想いをもっています。
- クラブには地域の方で組織された運営委員会がありますが、それとまた別に『親の会』が組織されており、月1回程度、全体での集まりを持っているようです。
- もともとこの親の会が独自に活動場所を確保して始まった『学童保育』に、横浜市が運営委員会の設置と常時20名以上の登録などの条件を前提に、1年生から3年生の子どもを受け入れについて補助をすることになったのが『放課後児童クラブ』です。
- つまりこのクラブの存在理由には『親の関わり』が不可欠だったわけで、新たに加わる親御さん達も、クラブでの生活を通して「どの様に子どもに育てていって欲しいのか」について、親としての意見を反映させ、指導員とともに指導方針を考えるのです。

昼間のおうちに『お帰りなさい』

- 今回取材させていただいた【三ツ境なかよし学童】は、6年生まで受け入れているクラブですが、入り口の引き戸を開ける子ども達の誰もが、まるで家に帰ってきたかの様にスッと上がり込んで来ます。
- そこに指導員から『お帰りなさい。』の声。
- 『公園に遊びに行ってきたいい?』『うん、おやつ時間には帰ってきてね。』最近耳にするニュースや身近な出来事を思うと、一見無謀な対応の様に聞こえます。
- しかし指導員は言います『《ひとりで元気に遊んで帰って来ることが出来る》と信じて送りだせるのは、日々繰り返す親とのやりとり、そして親と同じように関わりコミュニケーションをとっているから』
- 『ここでは個性の尊重という名をかりた放任は一切考えていない。誰もがひとりで生きてるわけじゃないってことを、具体的な例をあげて伝えます。親や地域がいつも支えてることを教え、年齢ごとの役割を意識してもらい、共有することを覚えてもらうために、他人とつながるような言葉の投げかけをしています。』
- 指導員が投げかける言葉は、こどもが指導員に寄せる信頼に確かに「応える」かのように見えました。
- 投げかけられた言葉の風船をいくつも体に付けたこども達は、知らぬ間に他の子の風船と触りあって『ああ、なんだ、話してみたらわかった』となり、回りのこども達と関係しながらも、自分の力で自分なりの生活を進められるようになっているのです。
- クラブの中は大勢のこども達で、ものすごく騒がしかったのですが、誰ひとりそれを「うとましがって」そばを向いているような子はありませんでした。
- 『ケンカして泣きじゃくる子にはまず、よく気持ちの部分話を話してもらおう。それから原因を聞いて、今度は双方合わせて『どうしたらいい?』と考えてもらう。こども達は、かならず答えを出そうとして相手のことも考えます。』
- 『一緒に考えること。それがほんとうにこどもの自主性を尊重することなのです。』